



いっしょに考える
「福島、その先の環境へ。」

チャレンジ アワード CHALLENGE AWARD 2021

受賞作品

主催：環境省 共催：福島県 福島県教育委員会

環境省 環境再生・資源循環局
環境再生事業担当参事官付
福島再生・未来志向プロジェクト推進室

〒100-8975 東京都千代田区霞が関1-2-2 電話番号：03-3581-2788
e-mail：mirai_shikou@env.go.jp

福島再生・
未来志向
プロジェクト



shiteihaiki.env.go.jp/fukushimamirai

いっしょに考える「福島、その先の環境へ。」 チャレンジ・アワード

趣旨、募集概要、作品の応募及び審査方法 P1

審査委員会委員一覧、審査委員会委員による講評 P2

最優秀賞(環境大臣賞)

未来のまち P5

福島県立ふたば未来学園中学校 1年 藤東 佑和

福島という新境地 P7

学校法人灘育英会 灘高等学校 3年 岩井 響

優秀賞(福島県知事賞)

身近なことから始める大切さ P9

福島県立ふたば未来学園中学校 1年 早川 征輝

私が目指す「新しいまち」とは～人と人とのつながり P11

福島県立只見高等学校 2年 渡部 茉莉

優秀賞(教育委員会教育長賞)

発電を通してもう一度 P13

福島県立ふたば未来学園中学校 2年 鈴木 里桜

熱意ある若者が集う福島をつくる P15

福島県立郡山高等学校 3年 紺野 陽奈

ライフステージに合わせた新たな健康教育の提案 P17

公立大学法人福島県立医科大学 5年 筒井 悠巴

入賞

双葉郡からワーケーションを P25

福島県立ふたば未来学園中学校 1年 伊藤 素弓

笑顔が豊富な福島へ P27

福島県立ふたば未来学園中学校 2年 三宅 恵未

食でなくす風評被害 P29

福島県立ふたば未来学園中学校 1年 大森 春花

伝承の町福島へ P31

福島県立ふたば未来学園中学校 2年 木田 剛生

未来を変える「さらしタオル」 P33

葛尾村立葛尾中学校 3年 渡辺 さくら

世界のFUKUSHIMAになる方法 P35

学校法人関西学院関西学院千里国際高等部 2年 松原 理乃

喜多方ラーメンから考えるゼロカーボンシティ「FUKUSHIMA」 P37

学校法人関東国際学園関東国際高等学校 1年 山田 尚輝

後世に語り継ぐ P39

学校法人コングレガシオン・ド・ノートルダム桜の聖母短期大学 1年 小林 史歩

いっしょに考える「福島、その先の環境へ。」 チャレンジ・アワード

〈趣旨〉

福島にゆかりのある学生たちによる、環境施策の提案や、福島の復興・希望ある未来を創造していくためのアイデア等を広く募集し、すぐれた作品を表彰することを通じて、これからの福島の環境を良くする若い世代のアイデアや想いをより多くの人々と共有し、行動を促すことで、福島の復興に貢献する。

〈募集概要〉

■募集内容

福島のこれまでの10年の振り返りと、これからの福島を「こう変えたい」、「こうなって欲しい」という未来や希望に関する自分のアイデアや想い

■テーマ

「福島、その先の環境へ。」

■キーワード

「新しいまち」、「SDGs を目指すまち」、「ワーケーションの聖地」、「再生可能エネルギー先駆けの地、ふくしま」、「地域循環共生圏」など

■募集期間

令和3年7月15日から同年9月30日まで

■募集部門/応募様式

- ①中学生部門：作文 1,200 字程度
- ②高校生部門：作文 1,500 字程度
- ③高専生・専門学校生・大学生部門：論文

〈作品の応募及び審査方法〉

募集期間において、福島県内外から中学生部門80件、高校生部門9件、大学生等部門2件の応募がありました。中学生部門については、事務局による一次審査を経て10件を二次審査対象作品とし、審査委員会による3部門の二次審査を令和3年10月26日に実施いたしました。

二次審査においては、各審査委員における採点と協議の上で各賞が決定されております。どの作品も力作揃いでしたが、応募数が少なかった大学生等部門は、福島県教育委員会教育長賞、入賞の2賞のみとなりました。

いっしょに考える「福島、その先の環境へ。」チャレンジ・アワード 審査委員会

委員一覧 ※敬称略

委員長 渡邊 明 国立大学法人福島大学名誉教授、地球にやさしい“ふくしま”県民会議代表

委員 CANDLE JUNE 一般社団法人LOVE FOR NIPPON 代表

久保田 彩乃 一般社団法人ヴォイス・オブ・フクシマ 理事

小松 太志 学校法人郡山開成学園郡山女子大学短期大学部 地域創成学科 准教授

番匠 克二 環境省 環境再生・資源循環局 参事官

星 正敏 福島県 生活環境部 次長

高橋 信幸 福島県 教育庁高校教育課 指導主事

〈審査委員会委員による講評〉

— 渡邊 明委員長

“いっしょに考える「福島、その先の環境へ。」チャレンジ・アワード”の応募作品を読んで、特に二つのことを感じました。一つは原発震災後の多くの苦難が、確かな経験としてレジリエンスな人材を育てていると感じたことです。特に中学生部門の多くの方が「原発震災の記憶がない」という言葉を挿入していますが、福島の課題に正面から向き合い、福島の未来を創造する姿を感じることができました。二つ目は福島県内と県外での原発震災の受け止め方が大きく異なっていることです。改めて原発震災の実態を伝承し、教訓を共有する重要性を感じさせられました。その意味でも応募者の皆さんと共に皆さんの「思い」を実現する社会を構築していきたいと思いました。

— 久保田 彩乃委員

今回も中高生・大学生の皆さんの福島に対するさまざまな思いや考えに触れる機会を頂き、本当にうれしく思います。1つ1つの文章を読みながら、震災から10年が経過したという事実と、チャレンジ・アワードに応募してくれた皆さんが、その現実にしっかりと目を向け「これからの10年に向けて何をすべきか」のアイデアをたくさん持っていたことに、驚きと共に安堵感、期待感を抱きました。これからの皆さんにはぜひ、作文に書いたアイデアを少しでも実行に移し、チャレンジしてみしてほしいと思います。そして今度は、その成果をまた報告するためにここに応募してください。このチャレンジ・アワードがそんな実践のきっかけの場として進化していくことを祈っています。

— 小松 太志委員

審査を通して、子どもたちも確かにあの時を過ごし、あれからを見て、聞いて、考えていることに気付かされました。子どもたちには震災や原発事故の負の遺産を背負わせたくないという想いから議論のテーブルから遠ざけがちですが、私たちはきちんとその声に耳を傾けることが出来ているのでしょうか。子どもたちは想像よりもずっと真摯で自由に刺激的な思考を巡らせていました。入賞作品を通して、その一端に触れていただきたいと思います。その星空のような思考の煌めきに心が突き動かされること、間違いありません。

若い世代の方達には「福島復興」という大きなイシューを通して、日本や世界に目を向ける学びの機会にしてほしいと願っています。チャレンジ・アワードはその入り口のひとつとなるでしょう。

— CANDLE JUNE 委員

チャレンジ・アワードからは子どもたちの学びと考えが生き生きと感じられます。大人からしたら確かに指摘したくなる部分もあるかもしれませんが、優秀な論文よりも私は温度を大切にしたいです。

完璧を求めることは大切ですが、不完全だからと諦めることで新しい可能性の芽が生えなくなります。

大人たちが忘れてしまいがちな大切なことを子ども達が伝えてくれる。そんな可能性がチャレンジ・アワードには存在していると思います。

— 番匠 克二委員(環境省)

震災や原発事故は、中学生から大学生の皆さんにとっては、小さなころの経験でよくわかっていなかったことかもしれません。しかし、皆さんの作品を見て、震災のことを学び、真摯に福島環境のことを考えていることが素晴らしいと感じました。また、一部の方の作品では、既に地域での活動に参加をしている様子が描かれ、頼もしく感じました。こうした若者がたくさん関わる福島が将来どのような地域になっていくか楽しみです。

このチャレンジ・アワードが、今後の福島のことを考えるだけでなく、小さなことでも良いので何か実際の行動に移すきっかけとなってくれると良いと考えています。

— 星 正敏委員(福島県)

今回のチャレンジ・アワードについて、震災当時まだ幼かった子どもたちが、しっかりと自分自身の考えを持ち、震災体験の有無にかかわらず、震災を振り返りながら、成長している姿が感じられ、非常に感動を覚えました。特に、中学生については、その後の10年間の福島県内の様々な状況変化の中で、その変化をしっかりと捉え、前に進むために何をすればいいのか、また、自分が何をするのかなど、「福島」に対する思いが大きく詰まったものとなりました。受賞の有無にかかわらず、いずれの作品においても、今回応募してくれた中学生、高校生、大学生たちがこれからの将来、福島のために、さらには日本のためにどれだけのことをしてくれるのだろう、と大きな期待感を持ちました。

— 高橋 信幸委員(福島県教育委員会)

今回で2回目となる本コンテストは、「福島、その先の環境へ。」というテーマに、応募者、それぞれの震災から10年間の思いが詰まった作品の数々に大変感動いたしました。中学生は、震災時のおぼろげな記憶を辿り、10年間の福島の変化を感じ取りながら、これから自分がどうしたいのかを力強く表現していたと感じました。また、高校生は、より具体的にどのように取り組むことが福島の復興に繋がるかという意識がはっきりとした作品が多かったと思います。このチャレンジ・アワードによって、応募した時点での生徒の心が刻まれていくことが復興を歩んできた証になっていくと思うと、非常に有意義なコンテストであったと思います。

最優秀賞

— 環境大臣賞 —

未来のまち

再生可能エネルギーを使い暮らす。

風評被害を乗り越え福島でとれた食品を食べる。

福島の良さを知りひとが来る。

そんな持続可能なまちになってほしいとおもう。

10年前私は2才だった。当時は地震について、原子力発電所の事故について何もわからなかった。だが最近になって震災のこわさが分かる。東日本大震災伝承館に行ったとき、積み重なったがれき建物に入り込んだ乗用車。人から聞いていた津波のこわさが実感として分かった。津波の恐怖を自分は話しをきいて知った気になっていたことを知った。

コミュタン福島に行ったとき原子力の怖さを知った。人の作ったもので住んでいた場所から逃げる必要があることに悲しみを感じた。私は、寮から自宅に帰るため、週に一回、帰還困難区域を通る。ブルーシートの隙間から壊れた家が見える。見るたびに心ぐるしくなる。また、福島の食べ物は放射線物質が基準値未満にあるにも関わらず、福島産の食べ物を食べない人がいて、風評被害がなくなることを悲しく思う。だが、福島は東日本大震災で被害を受けた福島で終わってほしくない。福島は震災を乗り越え震災の経験さえも糧とし持続可能な未来のまちであってほしいと思う。最近、地球温暖化が深刻になっている。今日本は80%以上を火力発電に頼っている。そして再生可能エネルギーは18%と低い。それを見た私は、各まちごとに再生可能エネルギーの発電所を作れば無駄なく地球に優しいクリーンなエネルギーを地産地消して二酸化炭素の排出量を減らせるのではないかと思った。福島にある川

福島県立ふたば未来学園中学校1年 トウドウ 藤東 ユウワ 佑和

での小水力発電、海を利用した洋上発電などを稼働すれば効率的に福島の電気エネルギーをまかなえるのではないかと思った。福島は風評被害を乗り越え福島の豊かな自然でとれた食品を食べてほしいと思う。そして、まちで地産地消しよう。そうすれば食品を運ぶときに排出される二酸化炭素の量を減らせる。そしてまちにお金がまわると思う。また福島には、良さがたくさんあると考える。広野町に越してきて福島の豊かな自然、文化を再発見出来た。豊かな森や秀麗な山々や古戦場や庭園。しかし、このような良さはあまり知られていない。これからはこのような福島のよさが広がってほしいと思う。具体的には都市部の子どもが夏休みなどの長期休業のときの地方に行くイベントの需要がとても多いことを知り、このことを福島にもいかせないかと思った。そうすれば交流人口が増え経済も回る。また長期的な視点で見ればその子どもたちが福島に住み定住人口も増えるのではないかと考えた。

このように未来の福島はエネルギー、食品が地産地消でき福島の素晴らしい自然と文化に人が集まる。SDGsでいうところの「8 働きがいも経済成長も」「11 住み続けられるまちづくりも」「12 つくる責任 つかう責任」「13 気候変動に具体的な対応を」に当てはまる、持続可能な未来のまちになってほしいと思う。

最優秀賞

— 環境大臣賞 —

福島という新境地

学校主催の福島合宿があった。毎年恒例となっているこの行事、興味はあったのだが毎年参加しておらず、高校最後の年、高3になってやっと重い腰を上げた。今の福島を支えている方にお話を伺い、参加者で議論するというプログラムが組まれていた。無論出発前、入念な下調べと当時のかすかな記憶を頼りに拙いながらも福島像をつくりあげた。東日本大震災。記憶にあるのは、テレビ画面に映画さながらの非現実が広がっていたこと。裁判記録等を読んだが、当事者意識がそこにあがる資料に現れるはずもなく、その反動からか、期待と、福島という未知の土地への好奇心を胸に合宿が始まった。

日く、10年経ったらしい。しかし、圧倒的な存在感を伴って姿を現したのは、バスでの移動中に見た、バリケードと、当時の姿かたちのまま残されている半壊した家であった。頭をよぎったのは、阪神淡路大震災。大都会で起きたその地震は、当時の写真を見るに、復興ははやかったらしい。だが皮肉にも、目の前の光景はそれと全く対照的であった。放射能汚染の問題があるとはいえ、どうやら都会と田舎の差は東京一極集中の文脈で語られる時に感じるもの以上らしい。また、復興に携わっている方や、当時電力会社で働いていた方にもお話を伺った。滲み出るような反省の意と、絶え間ない努力のお話だった。

議論をし、合宿を終えた僕には、残念ではあるが福島の未来への希望のようなものはあまり残らなかった。もちろん福島で出会ったすべての要素がそうであったわけではないが、一般に見聞きするのは、地震、そして原発事故という負の遺産の払拭とそれを後世に伝え残すという趣旨。福島には現代社会の抱える問題がいくつも転

がっている。震災関係はもちろんそうであるし、その他にも、進行する高齢化に戻ってこない若者たち、補助金問題もある。こんな事業やあんな事業で復興を成し遂げる、と強い決意のもと精力的に活動されている方もいるが、やはり現実は残酷であるように思う。処理水をめぐる世論を見ても、世間の目は依然として厳しい。福島は、原発事故の場所というレッテルが貼られたまま、歴史に埋もれてしまうのだろうか。

しかし僕が思うに、視点さえ変えれば福島は最先端の場所になりうる。人類がこれまで蓄積してきたその叡智の結晶の一つである原子力という技術。そして福島の事件を中心に発達する汚染物質の除去技術。このような知識、技術を進行形で扱い、進化させている場所はそう多くないはずだ。顕在化した高齢化。その対応は必ず、日本がそう遠くない未来迎えるであろう問題の解決への糸口になるはずだ。福島の全てが前代未聞である。ともすれば世界の諸問題のスタンダードを築きかねない。こう考えたとき、福島は歴史に埋没する被災地から一転、新境地となる。

福島も悪いことばかりではない。また、勸善懲悪で片づくほどにこの世界は単純には出来ていない。今の福島に接するとき、これを忘れてはいけない。過去は事実であり、そこから学ぶことはあってもそこで立ち止まってはいけない。福島の未来を考えると、これを忘れてはいけない。人によって立場は変わるし、考え方も変わるのだから、先の僕の主張は到底受け入れられないものかもしれない。しかし、やはり福島という土地、歴史は災害の教材で終わってほしくない。こんな視点もあるということを知ってもらいたいし、今、そして未来、福島に関わる方は胸を張って、福島を創ってほしい。僕もその一助となれたらうれしい。

学校法人灘育英会 灘高等学校3年 ^{イワイ}岩井 ^{ヒビキ}響

優秀賞

— 福島県知事賞 —

身近なことから始める大切さ

福島県立ふたば未来学園中学校1年 ^{ハヤカワ}早川 ^{マサキ}征輝

あの震災の直前。生まれたばかりの弟は、母に連れられて、病院から自宅に帰ってきた。久しぶりに、家族四人がそろうのを楽しみにしていた。お祝いをするどころか、いつも通りの一日ですらなくなった。

当時、父の仕事の都合で、福島県から離れた土地で暮らしていた。住んでいたマンションは、大きな円を描くように揺れた。まだ二歳だったが、かなり慌てた母の様子を覚えている。

震災が起きた翌日から、父は、毎日帰宅するのが遅くなった。いわき市と東京都をつなぐ役割を担う仕事をしていたからだ。生まれた弟の顔をゆっくりと眺めることもなく、東京都での三年間の任期を終えたようだ。

いわき市に転居した頃、

「海には入らない方がいいよ。」

と言われた。「きれいな砂浜なのに、なぜだろう」と、疑問を抱いたことを、鮮明に覚えている。両親は、放射線の影響が心配だったのであろう。

十年間、わが家では、震災から何年経過したかを、いつも弟の年齢に、置き換えて考えている。今では、いわき市の海で、釣りを家族で楽しんでいる。鰯や鯖などが釣れて、刺身にすると、とても美味しい。

今なお、福島県産の海産物や農作物は、危ないから買わないと考えている人がいる。福島県に対する偏見が続いている。放射線量が、基準値以下であるにも関わらず、「ふくしま」という言葉だけで、避けられてしまうことは、非常に残念である。

東京オリンピックでは、バウハ会長が

「福島の桃が美味しい」

と、発言していた。福島県産の食べ物は、美味しく、安全であることを広めてもらえて、嬉しかった。このような出来事を増やすことはできないだろうか。

まずは、福島県に住む人が、もっと県産の物を知り、食べることである。自分の住む土地のよさを知り、誇りをもっていかなければ、他者の心が動くはずがない。

自分が通う中学校がある広野町では、新たな特産物として、ミカンやバナナを栽培している。「綺麗」と名付けられたバナナは、名前の通り見た目も美しく、生産者の地元に対する想いが込められている。寒い地方で、これらを商品化する事に価値がある。可能性を信じ、実現できたことに大きな力を感じる。さらに、丹精込めて育てられた食べ物は、高い信頼をもてる。

また、実感を伴った経験を、丁寧にそして多くの人にも伝えていることが大切だ。福島産の物を、風評被害の払拭のためでなく、本当に欲しいと思ってくれるかもしれない。

自分ができることは、わずかかもしれない。でも、一人でも多くの人が、志を同じにして、協力し合えば、未来は変わっていくと思う。

優秀賞

— 福島県知事賞 —

私が目指す「新しいまち」とは
～人と人とのつながり福島県立只見高等学校2年 ^{ワタベ} ^{マコ} 渡部 茉子

2011年の東日本大震災発生から10年という月日が経った。

私は震災当時6歳で、3月の保育園卒園時の小学校入学を目前にしていた時期で曖昧な記憶しか残っていない。しかし、津波で自動車や家屋が流される様子をTVで見て、幼いながらに大変な恐怖を感じた事だけは覚えている。

私の住む只見町は、奥会津地方の日本有数の豪雪地帯で、海からも遠く離れているのだが、同年に発生した「平成23年7月新潟・福島豪雨」によって、只見川が氾濫し、激甚災害に指定された大規模水害が発生した。私の自宅は無事だったが、近所に住む祖父母の家は床上浸水の大きな被害を受けた。家の壁や畳は泥まみれ、家の骨組みだけが剥き出しになった様子は今でも忘れられない記憶だ。幸い祖父母は2階に避難し無事だったが、飼育していたニワトリ等の家畜は全て流されてしまった。福島県の農林水産被害は約99億円に上ったという。だからこそ、私にも町を襲った津波に対する恐ろしさはわかる。

原発災害があった相双地区同様、只見町も電気を生み出す町で、只見川には複数のダムがあり、水力発電という再生可能エネルギーで最大の基地となっている。原発災害で未だに故郷から離れた生活を余儀なくされている方がいることは他人事には思えない。令和3年の復興庁の福島県民の避難者数調査では現在でも、6916人という多くの方が10年に及ぶ避難生活を送っている。自らの住み慣れた故郷を遠く離れ、慣れない土地での生活は、身体的にも精神的にも負荷がかかるものだと思う。

一方、大幅に放射線量が低下した現在でも福島県全体に根深く続くのは風評被害だ。検査で安全性が確認された福島の美味しい野菜や果物であっても、疑いの目で見られてしまうことがある。山菜の宝庫の只見町でも、「コシアブラ」という山菜しか出荷制限がかけられていないにも関わらず、「コゴミ」、「ワラビ」等、すべての山菜の販売量が減少しているという。まだ福島の食べ物に対して嫌悪感を抱く人や、福島の食べ物の魅力に触れてもらえないのはとても悔しい。第一原発の処理水の海洋放出も決まり、10年経過してもさまざまな影響があることが伝わってくる。

そんな中で私たちは、総合探究の授業の一環として只見町の企業の方々と協力したプロジェクトを行った。地域循環・地産地消を目指して、只見の農産物と只見の企業で売られている商品を使ったオリジナルレシピを考えました。それは「えごま豆乳ラーメン」というものだ。只見町のトマトやえごま油、町の麴店の麺などを材料とした。

購入した方には、只見の農産物にも興味を持って欲しいと考え、手書きのレシピも作成した。さらには、只見町全体に興味を持ってもらいたいという願いも込めて商品開発をした。そのようなことで何が変わるのかと思う人もいるかもしれないが、その小さな取り組みの積み重ねこそが大事と私は考える。どんなに小さなことでも、それをきっかけとして只見町を、そして福島を知ってもらうことにつながるはずだ。

この活動で町の方々との交流を通して、私は改めて只見町民の良さも感じる事ができた。普段の何気ない日常でのちょっとした気遣いなど、とても恵まれた環境にあると感じる。当たり前だと思っていたことが、実はとても有難いことだと気付いた。そのような町に暮らす人々の良さも知って欲しいのだ。バーチャル空間でなくリアルな体験として、実際にその町に来てみて、その町に住む人と交流して、その町で生産された物を現地で食べて、町そのもの、町全体をトータルに知ってもらうことこそが何よりも風評被害への対策となるはずだ。

現代はICTの推進により人の仕事は次々にロボットへと変化しているが、人間同士のコミュニケーションの中で生まれるものや、小さな触れ合いの積み重ねからなる、人と人との関係にこそ、現代に生きる私たちが見失っている大事なものがあるのではないか。人類の歴史上、人間が積み重ねてきた人と人との触れ合いにこそ、若者ことばの「一周回って新しい」、そして、むしろ逆に「古くて新しい」価値、その先の未来にある本物の「新しいまち」としての必要十分条件と言えるのではないか。そして、さらに現在のコロナ禍に苦しむ社会では、ソーシャルディスタンスが取られ、テレワークも推進されている。学校でも、感染拡大防止対策のもと、黙食のお願いや、学校行事ができない、何よりお互いの表情がマスクで見えない等、ますます友人との楽しい時間が削られている。そもそも人と人とのコミュニケーションは、「オンライン」だけで成立するものではないはずだ。

原発被害、津波被害、豪雨水害から10年が経過し、復旧も進み「新しいまち」が建設され、インフラ環境は整ったが、人と人とのコミュニケーションという心の交流も、当然「人間」が暮らす未来、福島の復興には必要なのだ。その物理的な面と精神的な面との両方とも、そこに暮らす人々が実感できること、これこそが私が目指す本物の「新しいまち」だ。

優秀賞

— 教育委員会教育長賞 —

発電を通してもう一度

福島県立ふたば未来学園中学校2年 ^{スズキ}鈴木 ^{リオ}里桜

私の名前は富岡町にある夜の森の桜並木が由来だ。両親は私が生まれたころには夜の森の有名な桜並木のトンネルのすぐそばに住んでいて、桜が咲くころ生まれた私に「夜の森の桜並木をどこに行っても、忘れないでほしい」という思いから「里桜」と名付けた。

震災は人々から数えきれないほど多くのものを奪っていった。3月11日、あと2日で3歳になる日だった。多くの人が今までに経験したことのないほどの揺れと津波、そして原子力発電所の事故によって人々のそれまでの日常は止まった。私もその一人だと理解している。まだ小さかった私には震災の記憶がない。震災が起き、双葉郡から避難を余儀なくされた両親と私、そして祖父母は東京に避難した。幼稚園も東京の幼稚園に通った。小さい頃の記憶で覚えている一番古いものは幼稚園に通っていたころのことだ。何かが起きて東京に避難したということはその頃の私もなんとなくわかったが、なぜ避難しなければならなかったのかなんて、まだ幼かった私には全くわからなかった。しかし、震災は人々の心に深い傷跡をつけていった。

2年前、私は祖父母が暮らす浪江町に行った。まだ祖父母の家に泊まったことは一度もない。母は除染がされていても、まだ子供である私を浪江町に泊まらせることが心配のようだ。浪江町へ向かう車の中で見たのは、草が生い茂る更地、どこまでも続くソーラーパネル、人気のない建物だった。町を歩く人の姿なんてなかった。胸が締め付けられ、震災で双葉郡が大きく変わったことを実感した。

私は双葉郡が日本の再生可能エネルギーの可能性を切り開いていく場所になってほしいと思う。広野町には火力発電所がある。火力発電には、その主燃料である化石

燃料には限りがあり、いずれ枯渇する可能性が指摘されていることや、二酸化炭素を多く排出するため地球温暖化の原因になってしまうことなど様々な問題点がある。また双葉郡では過去に原子力発電を行い、震災の影響で事故が発生した。私はこのことから双葉郡が発電という面で大きなマイナスイメージを抱えていると思う。だが、プラスイメージもあると思う。浪江町には2020年、世界最大級の水素製造装置を備える「福島水素エネルギー研究フィールド」が建てられた。私はこの施設が水素を作ることに加えて、水素発電を行うこともできる場所になってほしい。水素発電は発電時のエネルギー効率がが高く、水素と酸素の反応により水が生成されるだけで、廃棄物が排出されないため、脱炭素社会の実現に向け、世界的に注目されている。水素発電を原子力発電所の事故が起きてしまった双葉の地で行えば、そこには大きな意義が生まれるだろうし、ほかの場所で水素発電を行うよりも注目度が高いと思う。また過去のように雇用の場も生まれる。水素発電は双葉郡を明るく照らしてくれる存在になるはずだ。

福島は「電力県」といわれるくらい発電の盛んな県だったと聞いたことがある。あの日、津波で原子力発電所の事故が起き、大きな発電源を失った福島県だからこそ、今度は最先端の発電を通して、世界とつながっていくべきだと思う。

優秀賞

— 教育委員会教育長賞 —

熱意ある若者が集う福島をつくる

地域に対して熱意ある若者が集い、大人や上の世代を巻き込んで福島県人全員が一丸となってまちづくりをする社会をつくりたい。また、この活動と共に、福島の学生が夢を見つけるきっかけづくりをしたいと考えている。そのために私は、地域の復興やまちおこしを目的とするNPOに所属し、経験を積んだ後に、独立して組織を立ち上げたいと考えている。

当たり前が当たり前ではなかったことに気付かされた2011年3月11日に起きた東日本大震災。先日の東京オリンピック2020では、一部の参加国が福島県産の食材や生花を使用することに、否定的な意見を挙げたことが問題になった一方、福島県で開催されたソフトボールの米国・オーストラリアの監督が福島県産の桃を「美味しい」と発言したことも話題となった。震災から10年が経とうとしている現在でも、「ふくしま」に対するイメージは未だに、震災・津波・原発事故というネガティブなイメージが根付いている。私はこれを、「ふくしま」のウチから全国、世界に向けたソトに福島県人全員で言葉を、魅力を、発信して伝えていかなければならないと感じた。

その一方で、震災をきっかけにたくさんの若者が東北に訪れた。3.11をきっかけに彼らが「東北」という価値観を発見し、社会や地域のことを考える若者が増えていくと、SNSを利用して、またあらゆるコミュニティと関わることで実感した。

私はSFF|福島人が営む集会所、その中で高校生のみの「郡山の集い」で活動している。自分のアイデアやアクションを共有し、フィードバックし合うことでその後の行動に繋がるヒントを得る場である、認定NPO法人カタリバが運営する「マイプロジェクト」に参加した。やってみてわかったことが大きく3つある。まずは、「繋がり

福島県立郡山高等学校3年 ^{コンノ}紺野 ^{ヒナ}陽奈

の繋がりを生む、人と人のネットワークは広がれば広がるだけおもしろい。

そして、地域のコミュニティは私たちの世代のものだけではなく、上の世代と協働していかなければならない。学生だけではやれることに限界がある。大人の力も借りて活動することで、出来ることの可能性も増え、応援してくださる支援者も増えてくれるにちがいない。

また、この企画には、88プロジェクトがエントリーしていた。その中で福島県は3プロジェクトしか出ていない。また、石川県や埼玉県のチームが多くいた。そして、私は個人的にこのプロジェクトを見つけて参加したが、他のチームは多くが先生の紹介でやってみた、という学生が多くいた。福島にはそのような知る機会はない。要するに、福島の学生にこういった学生が主体に活動できる機会を知るきっかけがないという問題があると気づいた。

このように意識を変化させてくれた「出会いのきっかけ」は、もっと多くの高校生に与えられるべきだ、と考えるようになった。なぜなら、同世代の学生がおもしろいアクションしていることの刺激を受け、多様なアクション・アイデアに触れることで自分の可能性が広がるからだ。

私が今福島地域活性化に向けてできることは、私が福島を好きだと周りの人に伝えることである。なぜなら人の感情は他者の感情へ移り変わりやすいものであるとこの一年間の実践してきた上で私の友人が発する福島言葉はネガティブからポジティブに変化したからである。

したがって、地域を高校生自らが輝けるきっかけにし、そこからさらに学生や大人を巻き込んで、若者を主体とする福島県人全員で、地域を変えられるんだという自信が持てるような社会を目指して活動していきたいと考えている。

優秀賞

— 教育委員会教育長賞 —

ライフステージに合わせた 新たな健康教育の提案

公立大学法人福島県立医科大学5年 ツツイ ユウイ 筒井 悠巴

I. 主題設定の背景と理由

人々の生活は、心身の健康の上に成り立っていることについては、多くの人の知るところである。そして、心身の健康は様々なものを土台になりたっているが、その土台の1つに環境があることは、過去に様々な公害が多くの人の心身の健康を脅かしたことから明らかである。

2011年の東日本大震災・原子力災害では、人々の生活環境が脅かされたことや、生活環境への不安から多くの人の心身の健康が脅かされた。

たとえば、福島県の県民健康調査においては、震災後の避難区域住民、特に実際に避難した人においては循環器疾患のリスクである過体重・肥満の人の割合、及び高血圧、糖尿病、脂質異常、肝機能異常、心房細動、多血症の有病率が上昇し、心筋梗塞や脳卒中などが起こりやすくなる可能性が考えられた¹、という先行研究も存在する。

また、原子力災害については、現在においても様々な情報が発表されている。適切で重要な根拠のある情報があれば、逆に誹謗中傷に近い風評も少ない。こういった中で、人々が適切に情報を選択するためには、人体と健康についての正しい基礎知識や科学リテラシーが必要である。

世界的には、国連において2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標として、持続可能な開発目標(SDGs)が打ち立てられた。その17の目標のなかには「すべての人に健康と福祉を」「質の良い教育をみんなに」という項目が存在する。²

福島県の現状とSDGsから着想を得た私を含む福島医大の学生数名は、2018年にPOMkProject(ポムプロジェクト)という団体を創設し、顧問教員と共に、福島県内で健康に対する教育を行う活動を開始した。

人体に関する知識は学校教育においてなされているが、それらが合科的に取り扱われ、健康維持に生かされているかという部分には疑問が残る。本稿では、この課題に対してこれまでとは異なる、ライフステージに合わせた健康教育について提案する。

II. 本論

1. POMk Project の創設

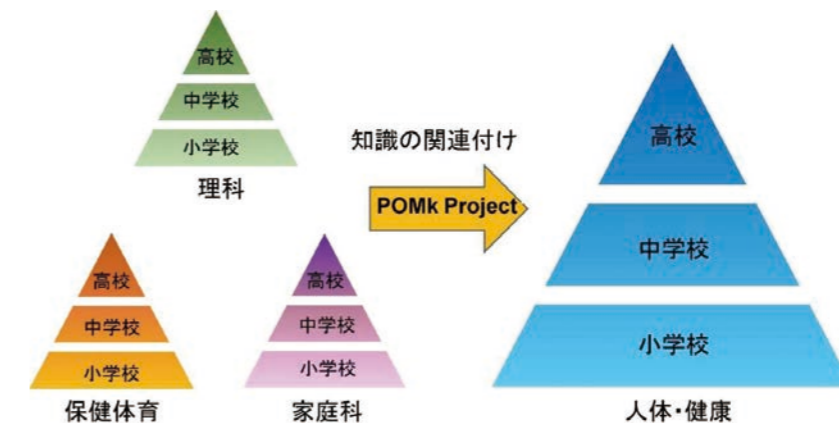
2018年より、福島県立医科大学内のサークルとしてPOMk Project(ポムプロジェクト)がスタートした。POMkとは、Popularization Of Medical knowledgeの

略で、日本語にすると「医学知識の一般化」という意味になる。

義務教育及び高等学校において、人の体について学ぶ機会は体感よりも豊富である。教科としては生活科に始まり保健体育、理科、家庭科、などで取り扱われる場合がある。³

しかし、残念なことにそれらはあくまで縦割りの知識でしかなく、結びつきに欠ける。POMkのアプローチは、その知識を統合し、からだの仕組みと病気の仕組みを体系的に知ることができるようにする点にある。

図1：POMk Projectの概念図。各科の知識を統合することで、体系的な理解を目指す。



かつて、医師に任せきりであった診療は、インフォームドコンセントという概念の元、患者が治療を選択する時代となった。これは一見、対話的な優れたシステムに感じられるが、同時に患者側、一般の人が自分のからだに対して正しい知識を持つ必要性を大幅に増加させた。もちろん十分な説明が前提で行われる選択ではあるが、患者側の責任は確実に大きくなった。

そこでPOMkは幅広い世代にからだについて、病気について知っていただく機会を提供し、社会全体の健康促進および医療との距離を近づけることを目標とした。現在は、活動母体として認定NPO法人POMk Project(理事長 挾間章博 福島県立医科大学教授)が設立され、学生サークルと連携しながら様々な活動を展開している。

2. ライフステージに合わせたアプローチ

一般に教育、という言葉は学校において行われるものが連想されるが、近年では生涯教育の概念の元、幅広い年代での学びの機会の需要が増加している。本項では、実例をもとに、各ライフステージにおいて必要かつ有効な健康教育について考察する。

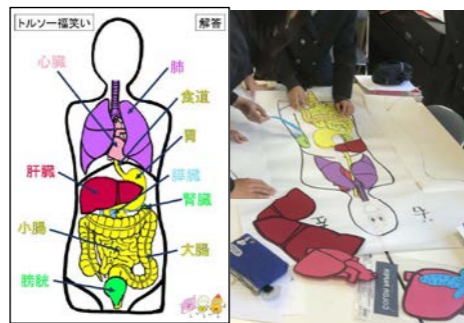
A. 学齢期に対するアプローチ

学校教育および学童教育等と共同で早期から健康教育を行うことで、その後の健康意識を向上させることはもちろんのこと、他科で学ぶからだについての内容を統合的に考える力を養うことを目標とした。

導入として行うことに、「からだ福笑い」というコンテンツを使用している。これは、腹腔内の臓器(呼吸器系、消化器系、心臓、泌尿器系)を色紙で模り、模造紙にパズルのように並べていく。ポイントとしては、平面的な場所だけではなく、重なりによる前後の位置(例：気管と食道の前後関係)や大きさの選択肢(例：心臓、肝臓)を設けることで、イラストだけでは感じづらい部分の解剖を直感的に捉えることができるようになっている。そして各臓器について知っていることを自由に共有したのち、授業という形で解説を行う。

図2：からだ福笑いの様子。

まずは生徒に並べてもらうことで、興味の引き出しと現状の知識の確認を行う。



可能な限り直感的な学びを可能にするため、可視化・可触化にも力を入れている。一例としては、石油ポンプを用いた心臓模型を作成した。一般に人体には約5L強の血液が存在し、心臓は1回につき約80mLを拍出する。そして市販の石油ポンプは灯油を一回につき約80mLくみ出す規格であり、おおよそ心臓と同じ拍出能を持つ。この性質を生かし、以下の図のように組み立てることで、肺循環と体循環を視覚的・触覚的に感じることができる。

図3：心臓のポンプ模型の図と説明資料の一部。全身と肺を模した容器に水を5L入れ、より実際の体内循環に近い環境を再現している。



活動としては活動に賛同していただいた学校で行う場合や、学童保育などの企画の一つとして行う場合がある。2018年度からは、会津若松市の会津若松ザベリオ学園中学校の探求学習の一環としてPOMk Projectの活動を行わせていただいている。

初年度は探求学習という名の通り、生徒の興味に合わせて学びを深めていくもので、私たちの側からはテーマとして「免疫」「骨・筋肉」「眼」「肺」「心臓・血圧」という5つの枠組みを提示した。活動を5回に分け、初回は生徒全体の理解度を測るためのフリーディスカッションと概論の説明、2回目以降は生徒自身が課題を設定し、先生方と協力しながら学習をサポート、最終回は保護者が集まる前でプレゼンテーション発表という形でまとめた。各グループ共通の要素としては、模型やゲームを用いた理解を積極的に行うこと、そして健康な日々を送るためにはどうすればよいかという問いに対する答えを考えることとした。

図4,5：「心臓・血圧」の授業で実際の血圧計を用いた血圧測定と、「免疫」における免疫パズルに使うための抗体を作成している様子



2年目はテーマを転換し、「老化とはなにか」というテーマを設定した。小さい頃は年齢を重ねるごとに「成長」を喜ぶものだが、いつしか「老い」を憂う。人としての変化という意味では同じなのに、全く趣が異なるこの二つの概念の違いと境界に向き合うことで、ここまでの成長を振り返るとともに、将来自分及び家族が直面するだろう老いへのレディネスの形成を目的とした。初回に行ったフリーディスカッションでは、成長に対しては身長や体重の増加、学習能力・運動能力の向上など、何かを「得る」というポジティブな印象の意見が多かった。一方、老いに対しては認知症、骨粗しょう症、白内障や緑内障など、具体的な疾患名を挙げてくれる意見が数多く見られた。最も、私たちが健康教育を根底においていることから、生徒たちも頑張ってくれた側面もあるとは考えられるが、少なくとも老いと病気の結びつきは大変強いものとして捉えられているようであった。2回目以降は、加齢が大きく影響する疾患を提示し、興味があるものを調べ学習してもらい、前回同様最終日にプレゼンテーション発表とした。

図6,7：実際に使用した資料の一部。生徒に今の自分を基準にして考えてもらうことで、成長と老化についてより身近に感じてもらえるように配慮した。



もう一つ、成長と老いに迫るヒントとして、人生年表の作成を実施した。少々センシティブな部分はあるが、ほかでもなく自分の一生で考えることには新たな発見が沢山ある。健康という部分では、今までに罹った病気や、家族から連想して自分の将来の年表に病気を書き込む例や自分の目標を達成するには何年必要か、という観点から寿命を設定する例など大変興味深いものが見られた。

教育の中で健康を取り扱う際、健康は一生を支えるものであり、それを保つために正しい見識を持つ必要があることを根底に置く必要がある。教科書的な知識を、生活のレベルで取り扱えるように昇華できるような学びを学齢期に提供することは、今後の健康意識の向上に大きく貢献するものであると考える。

B. 生涯教育としてのアプローチ

教育基本法第3条においては、生涯学習の理念として、「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。」と規定されている⁴。健康問題は高齢になるほど顕在化するものであり、それに伴い自分の体に対する関心や興味は増していく。統計こそないが、マスメディアに掲載される疾患は多くは加齢をリスクファクターとして持つものであろう。情報量が多い中、求められるのは情報の正誤を見分ける正しい知識であり、それを提供することは今後の持続可能な社会の実現のためには欠かせない。

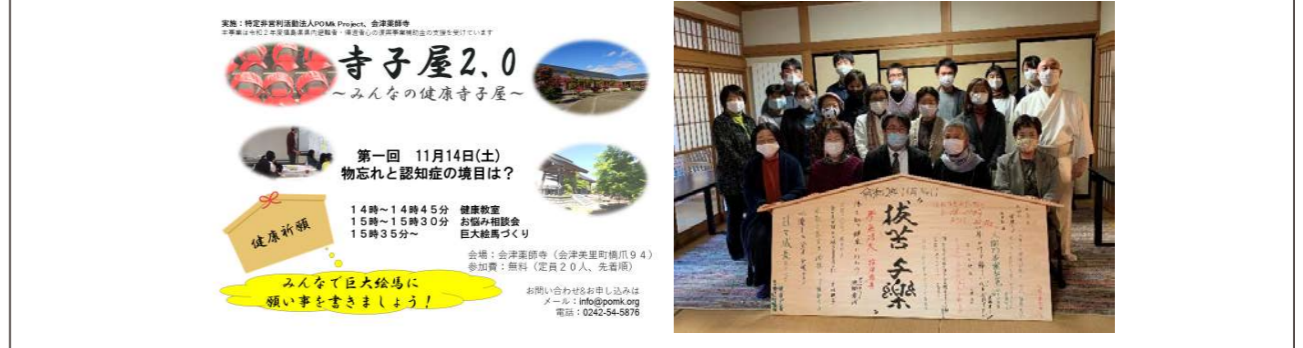
学齢期を超えた方々への健康教育の課題として、場所の設定と時間の問題がある。それぞれ仕事や家庭を持つことから、一堂に会することが学校のようにはいかない。そこで注目したのが地域資源の活用である。既存のコミュニティを活かすことで活動の基点をスムーズに作るができるのである。

一例として、「寺子屋」の活動を挙げる。古来より、寺院は地域住民の集まる場所として活用されてきた。結婚式や葬式などのライフイベントはもちろんのこと、時に公

民館的な使われ方や、学習塾のような立場も兼ね備えていた。様々な視点から見ても我々の活動と大変親和性の高い施設である。

実際の活動は、会津美里町の会津薬師寺にて行われた。ほとんどの参加者は月例で行われている写経会のメンバーとそのご友人であった。内容も年齢相応の需要に合わせた認知症や高血圧といった題材を用意し、解説を行った。終了後には、参加者全員で巨大絵馬を作成するなど、寺院ならではの特徴を生かし、人々の結びつきと健康への願いをより強くできるような試みも行った。

図8,9：募集のフライヤーと、参加者と作成した絵馬を囲んでの記念写真。新型コロナウイルス感染症対策のため、マスク必着での実施となった。



知識の提供、という側面に加えて、気心の知れた仲間とともに学んでいただくことで、有益な話題作りや集合する機会の増加、さらに新規のメンバーとの交流など、地域社会の活性化にも寄与できると考えている。

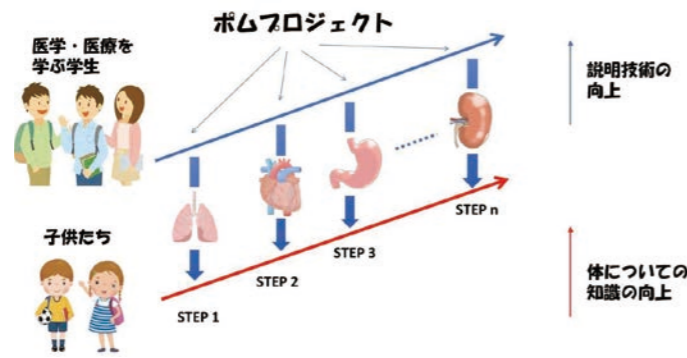
健康意識の向上を目指す際、意義深いものとして「理由を知る」ことがあると考える。例えば血圧対策に対し、どうして高血圧が体に不利益をもたらすかしっかりと説明できるであろうか。漫然とした理由で疾病予防を啓発しても、納得を得られることは難しい。病気の仕組みを丁寧に紐解くことでより効果的な行動変容が期待できる。

C. 医療系学生への教育効果

医療者の求められる重要なスキルとして「説明」がある。病状や治療について、十分な説明を行う義務があり、患者さん側はそれを基に意思決定を行い、治療を受ける。いわゆるこのインフォームドコンセントという概念が現代医療の基礎となっている。しかし、説明の技術について学ぶ機会は非常に少ないのが現状である。

POMk Project の大きな特徴として、教材の段階から学生主体で作成するという点がある。文章表現や挿絵、加えて適切な難易度や説明の順番など、分かりやすさに重点を置いて作成したものを実際に使用し、フィードバックして改善していく。これにより、コンテンツとしての質が上がることはもちろん、学生側の知識整理や説明能力の向上に大変有効であると実感している。

図10：POMk Project の概念図。お互いに学びを得られる点が大きなメリットである。



D. 今後の課題と展望

継続的な活動のためには福島県立医科大学だけでなく、県内の医療系の学校とネットワークを形成することを目指している。POMk Project の活動には、教材の制作や授業の実施に多くの人数を要する。また、福島県は面積がとても広く、毎回福島市から各所へ出向くことは難しい。それらの解決に加え、多職種で共同して作業を行うことでより深い学びが得られることを期待している。そして新型コロナウイルス感染症の影響もあり、オンライン形式での勉強会や健康教室などの開催も用意している。

様々な地域・年代の方々相手に講義を行う事で、医療者と一般の方々にどのような理解の相違があるのか、また一般の方々が何を医療従事者から詳しく知りたいと感じているかを肌で感じることができると同時に、自分たちなりにそれをアドバイスできるスキルも向上していると感じた。

Ⅲ. まとめ

東日本大震災・原子力災害に伴う福島県の健康課題やSDGs からの着想で、教育から健康意識の向上を図る試みを実例とともに考察した。健康は各々にとって一生付き合っていく課題であり、その維持には正しい知識と実践が欠かせない。適切な教育を提供することで、健康習慣の好循環を生み出せるものと考ええる。

そして、人体や健康の知識が市民に広くいきわたることは、同時に市民が健康に生活するために必要な環境を理解することにもつながる。これは原子力災害による健康影響の問題に限らず、環境と健康について、市民ひとりひとりが生きていくうえで自ら情報を取捨選択し、判断することを手助けすることになる。

また、医療系学生の人体と健康についての情報発信能力が上昇も期待される。これにより、原子力災害による健康影響など、環境と健康についての正しい情報を、適切に市民へ提供することができるようになると思う。実際に、震災後の放射線によ

る遺伝影響の有無についての東京都民に対する令和2年の意識調査によると、およそ4割の都民が遺伝影響ありと考えていることが報告されている⁵。それに対して、UNSCEAR（原子放射線の影響に関する国連科学委員会）の報告書によれば、福島での環境放射線量は十分に低く、遺伝影響が現れる可能性は極めて低いとされている⁶。また、本年の4月には、チェルノブイリの原発事故で被曝した親から生まれた子供たちに遺伝的影響が認められなかったとサイエンス誌に発表された⁷。このような科学的な事実に基づく報告をどのように一般市民へ届けていくか—この課題は、一朝一夕に解決するのは難しいが、福島に暮らす私たちにとって、とても重く、必ず解決すべき問題である。福島は、震災後も変わらず美しい景色を保っている。しかし、様々なメディアを通じて流れる福島を取り巻く「情報」という環境は、震災後、完全に姿を変えてしまった。この課題についても、私はPOMk Project の活動を通じて仲間たちと共に取り組んで行きたいと考えている。

この論文で紹介した取り組みは、私だけでは決して成し得なかった活動であり、本来であれば、POMk Project に関わった仲間たち皆で発表すべきものであるが、私が代表して活動の紹介を行った。私自身、学生である期間は残り1年ほどである。卒後については学生時代に築くことができた繋がりを大切にしつつ、ライフワークとして健康教育に携わっていきたい。

Ⅳ. 参考文献

1. 大平哲也, 中野裕紀, 岡崎可奈子, 林史和, 弓屋結, 坂井晃, 福島県県民健康調査グループ, 東日本大震災前後における生活習慣病の推移: 福島県県民健康調査 保健医療科学, 2018, Vol.67, No.1, p.34-41
2. “SDGs とは?” , 外務省ホームページ, 閲覧日 2021-09-28, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html>
3. 挟間章博, 学校で人体について何を教えているか, 日本生理学学会誌, 2016, Vol.78, No.2 p.35-40
4. 平成30年度文部科学白書 第3章 生涯学習社会の実現, 文部科学省ホームページ, 閲覧日 2021-09-28 https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201901/detail/1421865.htm
5. 震災から10年、福島県の復興や放射線の健康影響に対する認識をより確かにするために重要なこと 第3回調査結果の報告(2020年実施) 三菱総研MRI トレンドレビュー 閲覧日 2021-09-27 <https://www.mri.co.jp/knowledge/column/20201222.html>
6. UNSCEAR 2020 REPORT 閲覧日 2021-09-27 <http://www.unscear.org/unscear/en/publications/2020b.html>
7. Meredith Yeager et.al. Lack of transgenerational effects of ionizing radiation exposure from the Chernobyl accident Science 372(6543):725-729.2021

V. 謝辞

本稿執筆にご指導いただいた福島県立医科大学・挟間章博教授、垣野内景先生、そしてPOMk Project の仲間たちに感謝いたします。

入賞

双葉郡からワーケーションを

福島県立ふたば未来学園中学校1年 イトウ伊藤 モトミ素弓

福島はあの日から十年の歴史を刻んできた。もちろん、あの時幼かった私たちも、十年分の成長をしている。

私は、小さいころから頻繁に祖父母の家に行っていた。その時、車に乗って双葉郡を通っていた私は、驚きを隠すことができなかった。なぜなら、草は自分の背の何倍も伸び、明かりがつかないお店や、窓が割れて斜めに崩れているお店を見たからだ。しかも、そのようなお店の前にはゲートがかかっていた。

しかし最近、そのような光景は少しずつ変わってきている。

私は、中学生になってから総合的な学習の時間の授業で双葉郡の川内村という場所について探究している。川内村には今まで一度も行ったことがなく、山に囲まれた村なのかなとしか思っていなかった。でも実際に行ってみると、村の人たちはすごく優しくとても素晴らしい村だということが分かった。自然がひろがっていたり、さまざまな施設があったりと、充実した村であることが分かった。震災による影響があったとは思えないほど、素敵な村だと感じた。

ところで最近、新型コロナウイルスの影響で『テレワーク』をしている人が増えている。家の中でずっとお仕事をされていて、あまり外に出られない人たちに川内村のような、自然豊かな地域で、いわゆる『ワーケーション』をする人が増えるといいと思う。もちろん、川内村にはワーケーションに必要な要素が十分そろっていると考えている。私がそう考えた理由は、充実した施設や観光名所があるからだ。

ワーケーションの中の、バケーションという視点で見て、一番素晴らしいと思っている観光名所がある。そこは、川内村ならではの【天山文庫】だ。天山文庫とは、草野心平さんの本がたくさんある素敵な場所だ。天山文庫では、夏にお祭りがおこなわれていたり、草野心平さんの本を読むことができたりと、季節によって同じところでも違

いを感じることができる良い観光場所だと思う。

ワークという視点で見ると、川内村のような自然に囲まれた場所でのびのびと仕事ができるうえ、観光もできる場所はとても魅力的なのだろうと思う。私も、いつも車通りが多いところで生活しているので、川内村に试试看、その静かで自然の音が聞こえるところも魅力の一つだと感じられた。

このように、福島は自然豊かでいろいろな観光名所もある、ワーケーションをするにはピッタリな場所であると思う。この作文では、川内村を例に挙げたが、ワーケーションを行うのなら、ぜひ双葉郡で行ってほしいと思っている。私は、今までよりももっとたくさんの人に双葉郡の良さを知ってもらいたい。これからは、福島が新しいワーケーションの聖地として活躍して欲しいと思う。

入賞

笑顔が豊富な福島へ

福島県立ふたば未来学園中学校2年 ^{ミヤケ}三宅 ^{エミ}恵未

三月十一日、マグニチュード九の大地震が起こりました。この地震で何人もの方が亡くなりました。家族を失った人、この故郷を失った人、たくさんいるはずです。震災後、「こんな大地震忘れたい」と思う人がいます。でも毎年思い出す理由は桜があるからです。桜があることで今の福島はどんどん変わっていています。

私は県外から今の中学校に入学してきました。ですから震災当時の事はよくわかりませんでした。そんな私が詳しく震災に興味を持ったのは、中一の十二月に「子供の元気と笑顔と風船をありがとう」という広野のプロジェクトに参加したからです。そこで千個の風船と復興の福島への思いを空へ飛ばしました。震災で亡くなってしまった人に今まで福島を支えてくれてありがとうとの思いを込めました。桜を植えようと話を進めてくれた人にも感謝の気持ちを伝えました。このプロジェクトから私の広野への思いが「震災前よりきれいな福島にしよう」という思いへ変わり、復興にもっと協力しようと思うようになりました。

新しい福島への思いから、広野の行事に参加しました。一つは桜ウォークです。広野を歩きながらごみ拾いをしてきれいな福島への第一歩を踏み出しました。歩きながらみんなの思いがこもっている桜を見ながら地域の人に話を聞いて、震災当時の、人々の避難所での生活の苦しさを身に染みて感じました。震災の年も桜はきれいに咲いたそうです。でも桜を見て思い出すのはあの時の思い。桜からは震災当時の大変さ、苦しさ、悲しみが伝わってきました。震災を経験していない自分でさえこの思いが身にしみてわかるのなら、この作文を通して、他のみんなにも伝える意味はあると思います。私はこの思いを全国民に広げたいと思います。

震災の事を伝えるために実際に震災を経験した広野のプロジェクトを毎回企画してくださっている広野町の西本さんにお話を聞きました。話の中で二つ話題があり

ました。一つは桜についてです。まずなぜ桜を植えるのかというと、震災と一緒に経験した桜から震災当時を思い出すからです。始まりは高校生との約束から始まったそうです。震災が起こる前から地域づくりのために桜を植える計画をしていました。桜が咲き美しい広野にしようとして取り組んでいた矢先に東日本大震災が発生しました。桜の事なんて忘れていたくらい厳しかったそうです。震災後、あの日の高校生との約束を思い出し福島の「桜プロジェクト」が始まったそうです。この震災を共に過ごしてきた桜が必要で福島には欠けてはならないものだと思います。これからも一緒に生きていき沢山の思い出を桜に残していきたいです。

二つ目は子供の笑顔が大人を元気にすることです。大人は震災時ずっと働いて「何度あきらめそうになった。」と言っていました。そんな時に元気をくれるのは子供だったのです。作業をしている時、子供が走り回って楽しそうな笑顔を見るたびに元気をもらいましたと言っていました。その話を聞き私ができること。それは笑顔で挨拶しながら、地域の環境をきれいにすることです。ごみ一つない町にする。ランニングがてら、ごみを拾う。そして、通りすがりの人に元気な声であいさつをして町の人をみんな笑顔にしたい。きれいな環境と笑顔。これからも続けていきたいです。

入賞

食でなくす風評被害

福島県立ふたば未来学園中学校1年 オオモリ ハルカ 大森 春花

10年経っても何も変わらない。これは私が小学生の時に言われた言葉です。この言葉のいうように震災から10年経っても何も変わっていません。10年はただの節目とでしか扱われません。私は東日本大震災当時2歳だったので震災の記憶は全くありません。しかし当時の事をテレビで見て、震災の恐ろしさを知りました。私が、震災からの10年を振り返って、何も変わらないと感じるのは、風評被害の事です。放射能がすごくて危ないところなどと10年前の出来事でいまだに判断されてしまっています。この10年で目に見えるものについては、復興が進んでいることは確かです。しかし風評被害の悩みは続いています。私が今住んでいる地域も海で漁がおこなわれていて、スーパーなどでもその魚が売られています。ただ、まだ試験的に導入し始めたばかりで、常磐物はあまり売られていません。

福島が環境が元に戻っていることを全国に知らせ、風評被害をなくすにはどうすればいいのか。そう思っていたとき、学校給食で地産地消メニューとして地域で作られた野菜や果物、また、地域の高校生がとってきたカジキガツオでのカジキカツなどのメニューの給食が出ていました。きっと、他の県でもこのような給食はあるでしょう。このような地産地消の給食のアイデアは自分の住んでいる地域の新しいものが知れる機会になるのですばらしいものですが、私は逆に、福島県で材料で作った給食を他県の人に食べてもらえばいいと思いました。私の学校の給食には他の都道府県の名物や世界の食生活が感じられるメニューがでます。このような給食のように全国の学校で福島の食材を使った給食を出せばいいんじゃないかと思いました。なぜなら給食は当然安全なものしか出ませんし、その給食に福島産の食材を出せば、少なくとも学校の先生と子供たちは福島の食材を食べ、安全と思ってもらえると思うからです。

他にも、このような他県の食材を給食にすることにはいくつかのメリットがあります。一つ目は他の地域の食文化に触れ合えるということです。給食にすることで、自然と色々な地域の食文化と触れ合えて食べながら地域の食を学ぶことができます。次に二つ目は食料廃棄の量が減らせるということです。給食にすれば食材も沢山使うので、食料廃棄の量も減らせると思いました。福島の食材が余っているとの話を聞いたこともありますから、ぜひ給食で出すべきだと思います。三つ目は、福島の食材に興味を持ってくれる人が増えるかもしれないと思いました。いままで放射能を気にして食べなかった人たちも給食で出会ったことで、興味を持ってくれるかもしれないからです。

もちろん、生徒や先生しか食べることができないというデメリットもあります。しかしまずはきっかけづくりになると思います。福島が環境が回復していることをしっかりアピールする。全国での福島給食献立は、その一歩になると思います。

入賞

伝承の町福島へ

福島県立ふたば未来学園中学校2年 ^{キダ}木田 ^{コウセイ}剛生

「フクシマ」、「ヒロシマ」、「ナガサキ」。日本の中に、カタカナで呼ばれている三県が存在していることをご存じだろうか。まずは、福島県が日本の四十七分の三に該当していることを知ってほしい。

二千十一年。福島の影響はこの年に強く刻まれた。震災が起きてからというもの、福島は良い意味でも、悪い意味でも特別視されているのではないだろうか。

ここで一旦冒頭の問題に触れる。そもそも片仮名で呼ばれている県の共通点としては、世界的な問題に発展してしまったことだ。広島、長崎は原子爆弾投下。福島は、原子力発電所爆発。と周りに大きく影響を与えている。ここで一つ気を付けてほしいのが、福島は他の二県と違い、自然災害から起きている事故という点だ。改めて日本という国の自然の怖さを思い知らされる。少し話が脱線してしまったが、震災によって、福島は世界的な問題を抱える県となってしまったのだ。だからこそ、私は後世へと歴史を繋いでいく必要があると考える。

今年開催された「東京二〇二〇オリンピック」では、「復興五輪」ということで、福島県が多く関わる形となった。きっと福島が抱える問題について再確認した人が多いのではないだろうか。私はここで終わらせるのではなく、福島としても、アピールしていく必要があると思う。県内には、伝承館はあるが、問題は立ち寄ってくれるかだ。勿論、福島県民の方は来るかもしれない。しかし、果たして他県の方は来てくれるのだろうか。来るにしても、何かしらのきっかけがないと私は難しいと思う。

そこで私は、「オンラインでの参加」を考えた。というのも、直接伝承館に行かなくても、オンラインでの映像を共有し、実際に行き得られるような情報を自宅から得ることができる。このような活動を作れば良いと思う。仮に福島原発事故について知りたい人が居るとする。しかし、そのためだけに福島を訪れる人はどのくらいいる

だろうか。きっとそう多くはないだろう。だからこそ、オンラインにすることで、簡単にかつ気軽に参加できると思う。

福島は原発事故から現在にかけて、数々の風評被害を受けている。その中に、知識不足によって書かれた意見はどのくらいあるだろうか。たくさんの方が原発事故についての理解を深めたら、きっと風評被害の軽減にも繋がると私は思う。あくまでこれは国内の話だが、最終的には世界へ発信することが重要である。まずは、目標への一歩として、福島県民の私が故郷の問題を理解すること。そして、それが県民、国内、そして世界へと広がっていくことを目標に、これから頑張っていきたい。

入賞

未来を変える「さらしタオル」

葛尾村立葛尾中学校3年 ^{ワタナベ}渡辺 ^{サクラ}さくら

「何か私たちにもできるSDGsの目標はないだろうか。」

総合的な学習の時間の中で、SDGsについて学ぶ機会がありました。質の高い教育を国民が受ける、産業と技術革新の基盤を作っている、戦争のない平和な日常を送ることができる、という3つが日本でクリアしている目標だそうです。17もある目標の中で、達成できているのが3つだけということに衝撃を受けました。

そこで、14番目の目標の「海の豊かさを守ろう」を達成するために何か始めたいと強く思いました。川から海に流れ被害を出しているマイクロプラスチックを減らすために、マイボトルやエコバッグを使用することはすでに実践しています。その他に自分たちができることは、生活排水の汚水を無くすことだと考えました。

私たちは、家庭科の授業を利用して「さらしタオル」を作ることにしました。家庭科の先生に相談するとさらしを裁ち、ミシンで縫ったら誰でも簡単に作ることができる「さらしタオル」を提案してくださいました。そこに葛尾中学校のキャラクター「カットくん」をアイロンプリントし、オリジナルのものに仕上げました。これをきっかけにSDGsを意識した活動に全校生で取り組むことにしました。

さらしで作るタオルのメリットは、吸収性が高く、速乾性に優れている点です。梅雨の洗濯物が乾きにくい時期にも最適です。毎日、洗濯ができ、すぐに乾くので衛生面を考えてもとても気持ち良く使えます。自分たちや先生方で使ってみると、洗濯の際に洗剤の量を減らせる、タオルに比べて洗濯物の量が減るから節水につながる、さらしは丈夫で長く使えるなど嬉しい声が聞こえてきました。実際に私も使ってみて、エコを実感しました。薄いさらしでも十分に体の水分を拭き取ることができるのです。

ふわふわなタオルに慣れていると肌触りは良くないかもしれませんが、環境にはとても優しいタオルです。普段の生活に少し取り入れるだけで、エコな生活へ切り替

えていくことができます。コロナ禍で家にいる時間が増えているので、自分たちの生活を見直す良い機会ではないでしょうか。明るい未来を作るためにも、私たちが率先してできることを発信していく必要があります。

東日本大震災から10年が経ちました。いつまでも支援される側でいてはいけなさと子どもながらに感じています。これまでの支援を胸に、復興への一歩を踏み出すときなのです。若い世代の私たちが何かきっかけを作らなければなりません。私たち葛尾中学校の全校生徒4名で、定期的に福島民報新聞への意見投稿を行っています。「さらしタオル」についても投稿したところ、福島市で同じ活動をされている方が記事を見て学校に連絡をくださいました。私たちの発信を受け取ってくださる方がいる、そのことがとても嬉しかったです。そして確信できた瞬間でした。SDGsの目標を達成するために、「さらしタオル」の輪を葛尾から世界へ広げていきたいです。

入賞

世界のFUKUSHIMAになる方法

学校法人関西学院関西学院千里国際高等部2年 ^{マツバラ} ^{リノ} 松原 理乃

2011年、東日本大震災による原子力災害を経験した福島は、被災直後から「がんばろうふくしま!」というスローガンを掲げ、復興への道のをスタートさせた。私は今年の夏休みに、関西学院大学のPBL授業「福島で学ぶ復興と原発問題」の講座を高大連携生として受講し、福島の現状やエネルギー問題を学んだ。福島県庁や東京電力の職員の方などにお話を聞く中で、「福島でも10年の時間が流れている。復興はすでに終わった歴史ではなく、現在進行形、途上で続いている」という言葉が印象に残った。福島はゼロになったからイチからやり直そう、としている方々をみて、今まで自分は被災した人間ではないのでどこか人ごとだと思っていたが、自分のこととして関心を持って真剣に取り組んでいかなければいけないと気付かされた。

震災の翌年、スローガンは「ふくしまからはじめよう。」に変更された。“震災からの復興”という先の見えない戦いとは裏腹に、とても前向きなスローガンだ。そして、震災から10年の節目の年に「ひとつ、ひとつ、実現するふくしま」が策定された。「はじめよう」から「かなえる」へ。福島は10年で新たなステージに進んだといえるのではないだろうか。

なにを「はじめ」て、「かなえる」のか。福島が抱える、一番大きいであろう課題は第一原発の廃炉だ。廃炉には遠隔除染技術が不可欠だが、現状、震災前の安全神話時代の影響からか日本の廃炉部門のロボット技術は乏しい。これは危機的状況といえるだろう。ドイツやフランスといった原発大国には1970～80年代から緊急時のロボット等を予め整備しておいて運営する組織があった。福島第一原発の廃炉は今、世界の技術に助けをもらいながら試行錯誤やっている。私は、今福島がすべきことは廃炉および原子力技術の研究開発だと考える。廃炉、原子力の開発の拠点となれる場所は日本、世界に福島しかないだろう。それらの技術は福島の廃炉に間に合わなくて

も良い。今世界には運転中のものだけでも約450基の原発があって、いずれ全て廃炉しなくてはならない。そのとき、福島で生み出した技術で世界を助け、技術的なリードを取ることができたら、大きなビジネスになって、福島、日本の私たちは技術を誇りに思い、国内外からリスペクトされる国になるだろう。

地上では、脱炭素社会に向け、エネルギーのための核使用はしばらく続くと考えられており、モジュール炉や高速炉などの新しい原子力技術の登場や、核融合発電の実現も近いうちにくるだろう。また、宇宙開発において、外惑星軌道外は太陽光が弱いことや、地球を出るには莫大なエネルギーを要すること、宇宙空間では放射線を問題視する必要がないことなどから、原子力は必要とされる技術であり、開発をしておけば日本が世界をリードできる日がくるだろう。そのために、福島を世界の原子力技術の英知を結集させる地にし、研究大学といった機関をつくり、せっかく創設したロボットテストフィールドをもっと活用していきたい。そのためには国の積極的で惜しみない投資が不可欠である。そして、日本の、失敗を許さず、失敗したら叩いて、メディアは監視するといった空気は、福島の挑戦にとって邪魔になるので、明るい未来と夢を信じて見守らないといけない。

世界のFUKUSHIMAにする為に、今謳うべきなのは“知”であると考え。 “知”で必ず福島はプラスになる。日本は今、福島で、廃炉、原子力技術の現状に強い危機感を持って研究開発をはじめ、強い意思を持って取り組み、技術で世界をリードし、尊敬され、それを産業にする未来がかなってほしい。

参考文献

川妻伸二(2014年)「独仏における原子力緊急時ロボット」日本ロボット学会誌 Vol.32 No.1, p25-31
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jrsj/32/1/32_32_25/_pdf (2021/09/27)

入賞

喜多方ラーメンから考えるゼロ
カーボンシティ「FUKUSHIMA」学校法人関東国際学園関東国際高等学校1年 ^{ヤマダ}山田 ^{ナオキ}尚輝

祖父は喜多方市で杜氏と農家を兼業している。両親と一緒に帰省した際、「東日本大震災後でも日本酒は良いが、米や桃を高く買ってもらえない。」と嘆いていた。震災から10年経った今でも、福島県に対する風評被害は続いている。一方、ラーメン屋の前にはいつも観光客の行列があり、喜多方に行ってもなかなか食べられない。突出したブランド力があれば、風評被害をも払拭できることを教えてくれる。会津には磐梯朝日国立公園がある。特に美しい五色沼が好きだ。この自然の素晴らしさをいつまでも守り、たくさんの人に見てほしいと思っている。昨今、東京電力柏崎刈羽原子力発電所で発生した核セキュリティ対策不備の放置は、福島原子力発電所で想定されていた津波対策への不作為と同様の体質が、社内で全く改善されていないことを露呈した。国民の電力会社に対する不信感はつのも、会社や原子力発電所が社会的な信頼を得るには程遠い現状がある。

2011年に比べ2019年では、浜通りを中心とした太陽光発電による発電量が32倍、風力発電が1.2倍、バイオマス発電が3.4倍と、都道府県別の再生可能エネルギーによる発電量は増加し、国内トップクラスである。福島県内大規模太陽光発電所の最大出力は福島第一原子力発電所、3号機の最大出力を既に上回っている。2030年には、太陽光でさらに2019年の1.5倍、風力は4倍の発電量により、再生可能エネルギーで65-70%、2040年には100%の需要を満たすことが県の目標である。福島県の地熱発電、バイナリー発電のポテンシャルは決して低くなく、土湯温泉のような成功例もある。県内での開発を拡大するためには関係者の理解を得る必要があり、少し時間はかかると思うが環境に配慮した地熱発電も進めて欲しい。福島県では、浜通り、中通り、会津地方に、多様な再生可能エネルギー発電所と共に、風光明媚な自然公園が散在している。この社会見学と観光を同時に満喫できる福島県の強みを、モニ

ターツアーやファムトリップを通じて周知し、インバウンドも含め多くの観光客、アジアを中心とした世界の人々に体験してほしい。

私は情報通信インフラによるスマートシティの開発に興味がある。情報通信や再生可能エネルギーを担う新たな企業が地方都市およびその周辺のニーズに対応し産業を興すことで、各地域に応じた雇用機会を住民に提供し地域創成をできるからである。会津若松市では、太陽光発電を活用したスマートコミュニティが構築された。今後、福島市、郡山市、浪江町等でも、人工知能、IoT、ビッグデータに基づき、天候の影響を受けにくい再生可能エネルギー利用と送電網の設置、自動化された公共交通、防災や災害予知の技術が実装されたスマートシティが構築されることにより、地域経済の活性化が期待される。また近い将来のカーボンニュートラル社会に備え、出力の変動する太陽光発電から得られる電気を使い、水の電気分解で安定的に水素を製造するシステムを実証する「福島水素エネルギー研究フィールド」が浪江町に造られ、地域のエネルギー自給率を向上させる技術として期待されている。東京オリンピック・パラリンピック期間中には、福島産水素が都内まで運搬され、開・閉会式に灯す聖火の燃料、大会で運用される燃料電池バス、選手村の定置型燃料電池システム向けの燃料として供給された。ソーシャルネットワーキングサービスも駆使して、国内では道路網が発達し再生可能エネルギー先進県としての実績を上げてきた福島県の発信力を強化し、世界の中で突き抜けた「FUKUSHIMA」ブランドを作り上げたい。

入賞

後世に語り継ぐ

10年前の福島は、東日本大震災、原子力発電所の事故から復興できるのか、これから福島はどうなってしまうのかと言われていた。しかし、今の福島は多くの人の力を借りながら復興の道を進んでいる。復興の道を進む福島にとってこれから必要なことは、後世に自然災害と原子力の恐ろしさを伝え、私達が経験したことを風化させないことである。

先日、私は大学の授業で「ここで、生きる～911、311そしてコロナ禍」の映画を視聴した。これは、ニューヨーク在住の映画監督である我謝京子さんが、東日本大震災から10年経った被災地の女性達にスポットを当て、女性達の復興への思いをインタビューした映画である。この映画で、「震災から10年経って、一番怖いのは風化することだ」と答えた被災地の女性がいた。私はこの言葉を聞き、3.11に起きたことを後世に伝えていく活動に力を入れていく必要があると感じた。

これまでの福島は、語り部による伝承活動、東日本大震災・原子力災害伝承館の設立など東日本大震災、原子力災害を後世に伝える取り組みを行ってきた。これに加えて、福島県全体で東日本大震災、原子力災害に対する思いや考えを話し合う場をつくることを提案する。このような話し合う場をつくることで、後世に伝えていくことを自分事として考えることができるのではないかと。受け身で語り部や経験者の話を聞くだけでは、自分事として捉え、考えるということができづらい。3.11を経験した私達は、どうやったら後世に自然災害と原子力の恐ろしさを伝えられるのか、解決すべき問題は何かをひとりひとりが自分事として考えなければ、20年後、30年後のこの先ずっと風化させずに、語り継いでいくのは困難だろう。

そこで、福島県の子供からお年寄りまでが参加できる東日本大震災、原子力災害について話し合うイベントをオンラインで開催するのはどうだろうか。近年、アクティ

学校法人コングレガシオン・ド・ノートルダム桜の聖母短期大学1年 コバヤシ シホ 小林 史歩

ブラーニングが注目されている。受動的に学ぶより能動的に学ぶ方が、知識や考え方の幅があると言われていたため、以前より大学などの教育機関では導入されていたが、その流れをうけ、今では幼稚園・小学校・中学校・高等学校にも広まってきている。そのため、能動的に学べる、東日本大震災、原子力災害に対する思いや考えを話し合う場は、お互いに意見を交換することで積極的に話し合いに参加し、考えを深めることができるのではないかと。東日本大震災、原子力災害は福島県の中でも被害の大きさや状況は異なるため、自分の住む地域以外の体験談や生の声を聞くことができる。また、年齢や性別、暮らしている環境が違えば、考えや思いは様々であるため、新しい発見があるかもしれない。意見を共有した上で、より詳しく様々な視点から東日本大震災、原子力災害を見ることができる。また、オンラインで開催することにより、福島県内のより多くの地域から参加者を募り、このコロナ禍でも感染を気にせずに行うことができるだろう。

東日本大震災、原子力災害を後世に伝えていく上で大切なことは、ひとりひとりが自然災害、原子力についての知識と3.11に何が起こっていたのかをきちんと知ることである。そしてそれが、SDGsの目標11である住み続けられるまちをつくることにつながっていく。「天災は忘れた頃にやってくる」という寺田寅彦の言葉がある。自然災害は忘れた時に再び起こるものであるという意味で、被害を忘れることの危険性を訴えている。同じ失敗を繰り返さずに、住み続けられるまちをつくるためにも、後世に自然災害と原子力の恐ろしさを伝えることが必要である。そして、後世に伝えるということは、経験した私達だからこそできる活動であり、私達の役目なのではないか。